

飛騨びと言の葉綴り

HIDA CITY 20TH
ANNIVERSARY

飛騨古川吊るし飾り～『恋しい鯉に逢いに来い』 谷口充希子

古川町『吊るし飾りが奏でる、小さな鯉のメロディー』

「古川の吊るし飾りの魅力は、瀬戸川をゆったりと泳ぐ鯉やねえ」。古川町上野の吊るし飾り作家の、谷口充希子さん(77)だ。昭和22年揖斐郡大野町で誕生。高校を出ると岐阜市の全農に勤務。団塊世代の同期は30人。その中に生涯連れ添う夫、義隆さん(79)がいた。21歳で谷口家へ嫁入り。勤務の関係で新居は岐阜市に。2年後、長女を授かり退職。3年後には次女が誕生。「大野町の産院に産後も入院中だった昭和48年2月。義母が屋根から落ち脊髄損傷で入院！主人は飛騨の支店転勤となりこの家へ引っ越し。しかも10人家族の大所帯の中へ！」。

やがて次女も保育園へ。「料理好きやっただ、喫茶店を始めたい！」。昭和51年、喫茶「葵」を開業。「最初はお客も1日に12～13人」。3ヵ月が過ぎ、やっと一人二人と客足が増えた。18年後、岐阜市に単身赴任中だった夫が体調を崩した。充希子さんは店を閉め岐阜へ赴き夫を看病。

だが翌年夫が高山支店転勤となり、共に古川へ舞い戻った。「すると婦人会の会長さんが、『あんた副会長やってくれん？』って言わはって」。その後「町議会選挙があるで、婦人会からも誰か推薦することになった。一番若いのはあんたやで立候補しなさい。どうやら無投票らしいって話やで」って。

素人ばかりの手作り選挙選を経て、1997年古川町議会議員に。2001年に再選。2004年には、飛騨市の市町村合併に伴い、町議から飛騨市議会議員へ。2008年に議員を辞すも、2012年に再び市議へ。「また、定員割れらしいと、周りに乞われたんやさ」。

2016年任期を終え市議を辞す。「これからは好きな事がしたい！」。故郷、西美濃で見た墨俣の吊るし雛が忘れられない。「第二の故郷古川で、吊るし飾りを町中に飾り、観光客の滞在時間を増やしたい！」。38人の仲間と、吊るし飾り研究会を発足。

吊るし台は、上部に雲をあしらった高さ約2m。雲の下に紅白の丸い輪っかが付き、5本吊りや7本吊りと呼ぶ、奇数の人五(じんご)紐や人八(じんぱち)紐の縦糸が吊るされる。そこに古布で模った動植物の型の中へ綿を詰め込み、手縫いで綴じ上げ縦糸に吊るす。

充希子さんは、古川らしい吊るし飾りを作りたいと池の鯉を眺めては、「瀬戸川の鯉」の型紙を作り上げた。「吊るし飾りの本の鯉は、口が大きい。でも瀬戸川の鯉はおちょぼ口」。古布の反物を広げ、その柄行を矯めつ眊めつ眊め柄を選び抜き、反物から一部を裁断。瀬戸川の鯉のように、古布を型紙通りに一針一針縫い上げ、綿を詰め縫い綴じる。

「ある日孫が『池の鯉が死んだ』って。鯉を掬い上げたらビックリ！私が眺めとった鯉は川面から見える上半分だけ。川底側の胸鰭や腹鰭に尻鰭が、付いとらんかったんやさ！」。

6年前には、古川中学校の1年生向け家庭科の時間に吊るし飾りの出前授業を開始。同時に、飛騨市の姉妹都市、台湾の新港郷から文化交流として吊るし飾りの講習をと招聘もされた。話し好きの充希子さんの言葉に、故郷の西美濃弁はもう見当たらない。今では温もりのある飛騨弁がすっかり板に付いた。同時に故郷の誇りであった吊るし雛は、半世紀の時を駆け、飛騨古川の吊るし飾りとなって、この地を訪れる観光客の目を和ませ続ける。



たにぐち みきこ
古川町 谷口 充希子さん



市ホームページでは、フルバージョンやこれまでの連載もご覧いただけます。

文／オカダミノル
(飛騨市観光プロモーション大使)
イラスト／波岡孝治
(のみながらにがえ師)

